



マンダム、男性特有の“肌のギラつき”の発生メカニズムを解明 ～女性からの好感度を下げる“肌のギラつき”は初期老化のサイン！～

株式会社マンダム(本社:大阪市 社長執行役員:西村元延 以下マンダム)は、男性特有の顔面における見た目に好ましくない反射光である「ギラつき」の発生メカニズムを初めて解明しました。この研究成果は、平成20年11月26日に開催された第63回SCCJ研究討論会(東京商工会議場ホール)にて発表し、さらに平成21年6月12日の第34回日本香粧品学会「シンポジウムⅡ『おとこ力を考える』」でも、この内容を含んだ講演を行っています。

【概要】

1. 男性の顔肌に対する女性の目は、「アブラ」に関して非常に厳しい
2. 男性顔肌上での「ギラつき」は好感度を下げている
3. “グレア現象(=好ましくない顔肌上の反射光)”の原因は皮脂のみではない
4. “グレア現象”は「肌色」と「キメ」が重要ポイント
5. “グレア現象”は初期老化のサイン
6. 肌色数値と肌表面の反射部分面積により、「グレア度」を数値化
7. “グレア現象”はスキンケアにより改善が可能

1. 男性の顔肌に対する女性の目は、「アブラ」に関して非常に厳しい

マンダムは、男性の顔肌に対する理想を探るべく、20歳代～50歳代の男女計824名(各性別・各年代103名ずつ)に対して、男性には自分自身の顔肌に関し、女性には自分のパートナー男性の顔肌に関し、それぞれ「男性の顔肌の理想状態に必要なこと」を調査しました。

その結果(図1)、男性は当事者としての意識からか、どの項目も半数以上が「重要である」と回答しました。一方、女性が「重要である」と考えている率は、ほとんどの項目で男性よりも低く、一見寛大な視点で男性の顔肌を評価しているように見受けられます。ところが、「触ってアブラっぽくない」「見た目にギラついていない」といった皮脂(肌上のアブラ分)に関わる項目のみ、男性と同等、もしくは僅かに上回る回答率となりました。つまり、男性の顔面上の皮脂に関わる現象に関して、女性は厳しい目で評価していると言えます。

男性の顔肌悩みで常に上位を占めるのは、アブラっぽさ、テカリ、ギラつきといった皮脂に関する悩みであることは以前からわかっていましたが、上記の調査結果から、女性が見る男性の顔肌の印象も、皮脂及びそれに由来する外観(肌上の反射光)によって大きく左右されることが示唆されました。

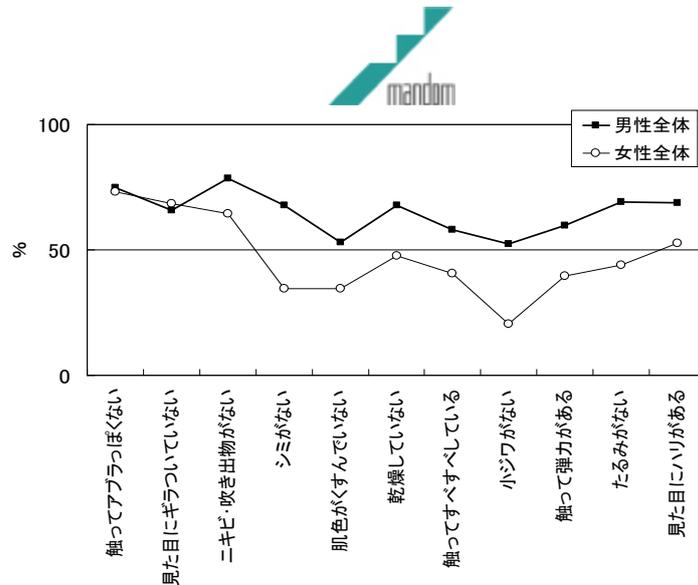


図1 男女別男性の顔肌の理想状態に必要なこと（選択した人数の%）

2. 男性顔肌上での「ギラつき」は好感度を下げている

皮脂に由来すると考えられる顔肌上の反射は、男性自身の顔肌悩み、および女性が見る男性の顔肌印象に直結する現象であり、この改善ができれば、男性にとって非常に有用なことと考えられます。よって我々は、男性顔肌上に起こるこの特有の反射光を「グレア」と定義し、それが目立っている状態を「グレア現象」と表現することとしました。

※ 本来、グレア (glare、眩輝) とは、不快感や物の見えづらさを生じさせるような「まぶしさ」のことを意味します。日常で接することのある「グレア」の例として、ディスプレイの反射(他の光の写りこみ)、自動車のヘッドライト、競技場のナイター照明などが挙げられます。いずれのまぶしさも、好まれない、不必要な光です。

表面の反射光を表す言葉には「ツヤ」「テカリ」「ギラつき」などが挙げられますが、これらの表現の評価観点に違いを考察しました。複数人の男性の画像を見たときの印象に対する女性の方々の評価結果によると、「テカリ」と「ギラつき」はどの女性も、各男性の画像に対して概ね同じように評価しましたが、「ツヤ」という観点では、どの男性がツヤの程度が高いかは、評価する女性によって大きく異なりました。つまり、「ツヤ」は評価観点があまり統一されていないことが伺えます。また、同時に評価した「好感度」との関係を見ると、「テカリ」と「ギラつき」はいずれも好感度の高さと相反する、つまり「テカリ」「ギラつき」が目立つ画像に対する好感度は低いと評価されていました。さらにこの二者を比べますと、「テカリ」よりも「ギラつき」のほうがより「不好感度＝不快感」と高い相関関係を示す表現であることがわかりました。「テカリ」という言葉は女性のメイク崩れも連想しますが、「ギラつき」はほとんどが男性の見た目を対象に使われる言葉でもあります。したがって、我々が考えた「グレア現象」は、「ギラつき」と表現される現象に最も近いと考えられました。

これまでのマンダムの男性顔肌に関する調査から、男性の顔面上の皮脂分泌量は、20歳代をピークに加齢に伴い緩やかに減少していく傾向が確認されています。ところが、若い人の肌はアブラが多くても見た目にはギラついた印象が少ないのに対し、年齢を重ねると見た目に好ましくないギラつきが生じている印象を受けます。我々は、その原因が肌そのものにあるのではないかと考え、ギラつき印象度と様々な皮膚の計測値との関係を調べました。

3. “グレア現象”の原因は皮脂のみではない

男性 20 名の被験者について、洗顔前(皮脂が多く存在する状態)と洗顔後(皮脂が洗い流された状態) それぞれに、前額部の画像撮影を行いました。同時に皮脂量の計測も行い、肌色、キメの評価も行いました。

画像撮影は、偏光フィルターを使った方法で行い、肌表面で反射する光と肌色を分離して解析しました(図 2)。ギラつきの印象度は、「肌表面の反射+肌色」の画像を使ってスコア化しました。

洗顔する前と洗顔した後を比較すると、洗顔によって皮脂が洗い流されるため、ほとんどの被験者で洗顔後にギラつき印象度が低くなっていました。ところが、皮脂の量との関係を確認してみると、顔面上の皮脂の量が同程度でもギラつき印象度に差がありました(図 3)。このことから、ギラつきが目立つ、すなわちグレア現象の原因は、皮脂量だけではないことがわかります。



図 2 偏光フィルターを使った撮影画像(前額部)

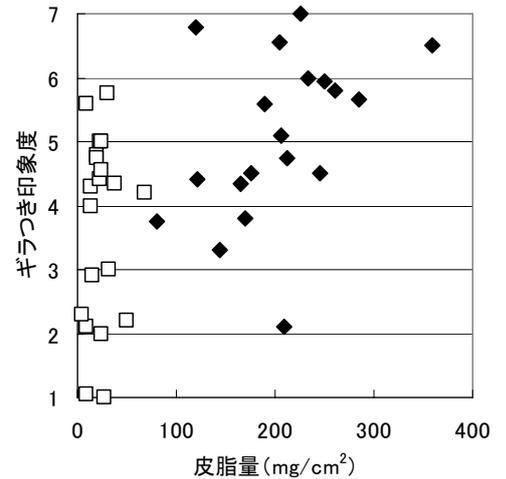


図 3 ギラつき印象度と皮脂量の関係

◆洗顔前 □洗顔後

4. “グレア現象”は「肌色」と「キメ」が重要ポイント

そこで、皮脂量以外の皮膚計測結果について、ギラつき印象度との関係を調べました。肌のキメについては、粗くなるほどギラつき印象度が高くなっていました。キメの凹凸がある場合は肌表面で細かく光が分散しますが、この肌表面の細かい光の分散がなくなると鏡のような状態になり、より反射が強調されることによると推測されました。また、肌の色では、明度が低い(色が暗くなる)ほど、あるいは赤みが強いほど、それぞれギラつき印象度が高くなっていました。これは、肌表面で反射する部分とその周辺の光のコントラストが強くなることで、ギラつきが目立ちやすくなっていると考えられます。

また、皮脂量及びキメや肌色が、ギラつき印象度に対して与える影響について、ギラつきの印象度スコアと各皮膚計測値を用いて、統計学的に解析したところ、ギラつき印象度に対する影響の大きさは皮脂量、キメ細かさ、肌色明度、肌色赤みの順で、皮脂量がもっとも強く影響を与えていたものの、キメや肌色もギラつき印象度への影響は大きく、グレア現象に対する重要な要因であることがわかりました。

5. “グレア現象”は初期老化のサイン

グレア現象は「皮脂量が多い」ことだけではなく、「色が暗い」「赤っぽい」「キメが粗い(消失した)」ことによって、高められることが明らかになりました。これら「肌色が暗く変化すること」「肌色が赤っぽく変化すること」「キメが粗くなること」は、男性顔肌の加齢による変化であるということがこれまでの男性皮膚研究の結果からわかっています。すなわち、老化した肌は、たとえ皮脂量は同量であっても、グレア現象がより起こりやすい肌になっているといえます。

グレア現象は、肌の老化が始まった、初期の危険信号(サイン)なのです。

6. 肌色数値と肌表面の反射部分面積により、「グレア度」を数値化

ギラつきが目立つ現象が、見た目によどのような特徴を持っているかがわかれば、撮影した画像の数値的解析によって、撮影画像の「グレア度」を数字で表すことができます。実際のギラつきの印象度スコアとの関係性を検証しながら、解析を行いました。

その結果、図2の「肌色のみ」の画像における肌色数値、及び図2の「肌表面の反射のみ」の画像を二値化(白黒に変換)して得られる白色部分の面積値(図4)を用いることで、グレア現象の数値化が可能になりました。グレア度は次のような式で示すことができます。

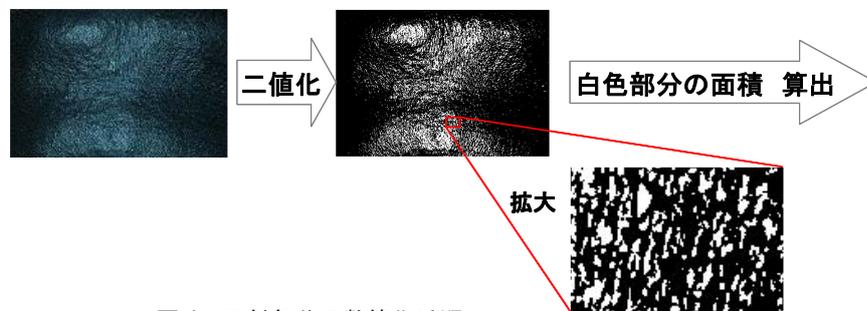


図4 反射部分の数値化手順

$$\text{グレア度} = A \times (\text{肌色の数値}) + B \times (\text{白色部分の面積}) \quad (A, B: \text{それぞれの重み係数})$$

なお、図4の白色部分の面積は、皮脂量が多いほど、また、キメが粗いほど大きくなることもわかっています。

実際に目視評価したギラつき印象度と、この式から導かれたグレア度の例を図5に示しました。



図5 グレア度 実際の評価と画像解析評価の比較

左：ギラつき印象度 6.0、画像解析値からのグレア度 6.2

右：ギラつき印象度 2.3、画像解析値からのグレア度 2.5

7. “グレア現象”はスキンケアにより改善が可能

では、グレア現象を改善するための対処法についてですが、最も大きな要因である皮脂を取り除くことはもちろん有用ですが、男性の皮脂分泌は非常に盛んであり、いつでもそれを取り除くことができる状況とは限りません。我々は、適切なスキンケアによって「グレア現象が起こりにくい肌」を作ることが実現できると考えています。

実際に、LC薬用フェイシャルローションを2ヶ月連用して、皮膚状態が改善された例を示します。

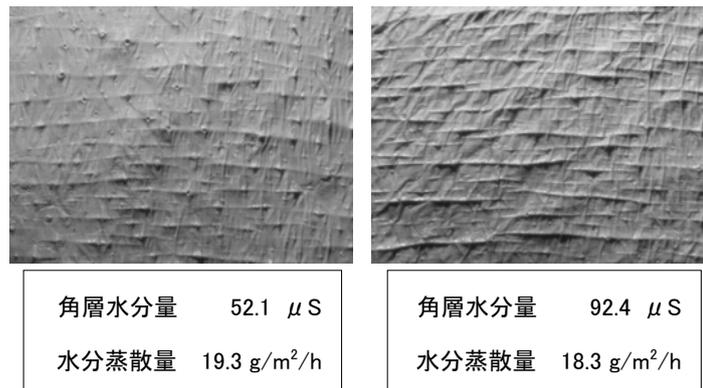


図6 L C薬用フェイシャルローションの2ヶ月連用によるキメ状態及び角層水分量と水分蒸散量の変化（40歳代男性）

左：L C薬用フェイシャルローション連用前 右：L C薬用フェイシャルローション2ヶ月連用後

角層水分量が上昇し、水分蒸散量が低下したことは、皮膚の水分状態が改善されたことを示し、その結果、キメも復活しています。（図6）

このようにキメが復活して細くなったときのグレア現象の変化については、皮脂量はほぼ同量ですが、キメの改善によって、見た目にグレア現象が改善していることがわかります。また、明度もやや上昇しており、画像解析値からのグレア度も低下しています。（図7）

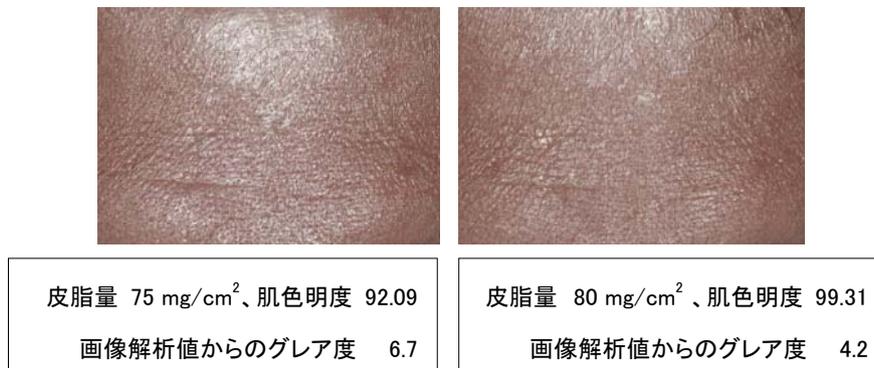


図7 L C薬用フェイシャルローションの2ヶ月連用によるグレア現象の変化（40歳代男性）

左：L C薬用フェイシャルローション連用前 右：L C薬用フェイシャルローション2ヶ月連用後

男性は女性よりも野外での活動が多く、日常的に紫外線防御が充分でないために、キメが粗くなり、肌色が暗くなりやすいと考えられます。これが男性特有のグレア現象を生じる主な原因と考えられます。

この様に男性の顔肌特有の好ましくない反射光（＝グレア）について、マンダムが初めてその皮膚科学的解明を行いました。今後も、男性の顔肌悩みを解決すべく、「グレア現象」を改善することを目的としたスキンケア理論の構築や、成分の開発に努めてまいります。

以上

この件に関するお問い合わせ 株式会社マンダム 広報 IR 室 村上 TEL 06-6767-5020
